

「おたく」史を開拓する

—一九八〇年代の「空白の六年間」をめぐる—

山中 智省

— 「おたく」史の「空白の六年間」について

中森明夫は「おたく」から「OTAKU」へ世に出て25年「世界語」に「朝日新聞」08・4・22朝刊)で、次のように述べている。

(引用者注・「おたく」という言葉は)一九八三年、「漫画ブリッコ」という雑誌の6月号に掲載された私のコラム『「おたく」の研究』が原典である。アニメや漫画マニアの若者らを揶揄したギャグっぽい文章だったが、同誌の編集者・大塚英志氏に「差別的だ」と批難され、たった3回で連載打ち切りとなった。そもそも「漫画

ブリッコ」はロリコン系の漫画雑誌で、その読者こそ「おたく」的な人々だったのだ。その後、急速に彼らのあいだで「おたく」の語は流通してゆく。しかし、それはあくまで一部の若者らの領域でのみ通用する符丁にすぎなかった。89年夏、連続幼女誘拐殺害事件の容疑者として26歳の青年が逮捕され、彼の部屋がテレビ画面で報じられる。ビデオテープや漫画雑誌が山と積まれた異様な光景。不可解なその性向を理解する手立てとして、「おたく」の語は発見され、一挙に一般化した(当時、『現代用語の基礎知識』にも、マスコミ図書館と呼ばれる大宅壮一文庫の検索項目にも「おたく」の語はなかった。現在では『広辞苑』にすら載っ

ている)。

ここで中森は、特に「おたく」という言葉が世に出たとされる一九八三年と一般化したとされる八九年を焦点化しており、各々に対して関連事項を踏まえた言及がなされている。ところがその間の六年間については「急速に彼らのあいだで「おたく」の語は流通していく。しかし、それはあくまで一部の若者らの領域でのみ通用する符丁にすぎなかった」という平易な解説がなされるのみで、その具体的な様相については不明瞭なままである。

中森の記事に見られるこのような特徴は、これまでの「おたく」研究が八〇年代の状況に言及する際にも見受けられたものである。すなわち八三年と八九年についての言及は盛んである一方で、その間の六年間は先に見られたような平易な解説で済まされてしまうことが多く、綿密な調査・分析が及んでいない、いわば「空白の六年間」ともいふべきものが存在しているのである。

しかし後で確認するように、この間に見られた「おたく」という言葉をめぐる状況は、安易に語ることでできないほど複雑な様相を呈していた。それにも関わらず「空白の六年間」が生まれた背景には、「漫画ブリッコ」など当時の状況を知る上で有効な手段となる言説資料の散逸がある。また、その補完のために用いられる同時代

の人々の証言が、先の中森の解説と同様の内容であることが多かったことも要因の一つだろう。

ゆえに、この「空白の六年間」は長らく「おたく」研究の「未踏地帯」とも言うべきものであった。しかし、近年では彼の地を開拓しようとする動きが徐々に見られはじめており、例えば難波功士、松谷創一郎、森川嘉一郎、吉本たいまつらが一定の成果をあげている(1)。また言説資料の散逸についても、京都国際マンガミュージアムや米沢嘉博記念図書館の設置によって体系的な整理が進みつつあり、今後研究の射程が大幅に拡大することが期待される。「おたく」という言葉が世に出てから二五年という節目が過ぎ、このように研究に適した環境が整いつつある今、「おたく」史の空白や定説化された内容を再度問い直していく必要があると考えられる。

本稿は八〇年代の「おたく」という言葉をめぐる状況に注目し、その具体的な様相を明らかにすることを目指すものである。特に本稿では「おたく」言説に見られた特徴的な動向を通時的に整理し、「おたく」の語られ方やその流通状況の一面を探ることを試みる(2)。なお、「おたく」には複数の表記法が存在するが、本稿では便宜上、引用部を除き表記を「おたく」で統一した。

二 中森明夫『おたく』の研究」から「おたく」論議へ

中森『おたく』の研究」は、その差別的な内容が「漫画ブリッコ」誌上で問題視され、読者や編集部を巻き込む「おたく」論議を引き起こした。その詳細は別稿で触れたが(3)、注目すべきはこの論議の初期の時点、すなわち第一回『おたく』の研究」掲載と同時期に、すでに「おたく」という言葉が「漫画ブリッコ」以外に伝えられていたことである。それは新刊情報誌「Sage」（三共社）八三年七月号に掲載された中森のコラムである。当時中森は「Sage」において「本に関する情報」というコラムを担当しており、「漫画ブリッコ」で連載を始めた『おたく』の研究」をリアルタイムで紹介していた。

このコラムで中森は『おたく』ってのはまあウジウジネクラマニア少年の総称なんだけど、連載開始直後に自ら我こそは『おたく』なりと名乗る読者から中森明夫大批判が寄せられ連載続行が危ぶまれてる状態」と述べている。そして同年一〇月号では『おたく』の研究」の連載が急遽打ち切られたことを伝えるとともに、「漫画ブリッコ」の投稿欄に掲載された読者からの批判と編集部のコメントを引用した上で「おたくにならずんばおたくを得ずではないが、それこそ世の中誰もが『おたく』なのだ、人間は『おたく』的生物である、ということこそ言

いたかったんだけど、どうやら通じなかったみたいね(中略)なんだか弱い者いじめのクラスのガキ大将が緊急ホームルームでクラス全員につるしあげられているよーな図」であると反論を述べている。

連載の打ち切りについて中森は、意図が伝わらないまま一方的な圧力によって行われたと捉えていたようである(4)。その反論が「漫画ブリッコ」ではなく「Sage」に掲載されているのは、打ち切り当初の圧力の強さを物語るものではないだろうか。その後「漫画ブリッコ」八三年一二月号に掲載された「おたくの研究—総論」では、第三回までの蔑視は薄れ「人間誰しもモラトリアム期間のまま一生をすごす、ということとはできない。いつかは大人にならなくてはならない」という主張が述べられている(5)。

こうした変化が見られたのは、編集部が読者からの批判を解消する形での幕切れを望んだための措置であったと同時に、「Sage」において中森が「どうやら通じなかった」と述べていた意図を別人名義で再提示するという目的があったように思われる。中森は「漫画ブリッコ」八四年一月号に再登場したものの「どうやらおた〇ってのは差別用語に指定されちゃったらしく使えなくなっちゃった」と、読者や編集部からの批判を自虐交じりで語った文章を最後に同誌を去った。

「Sage」の中森のコラムが『おたく』の研究』と同時に連載されていたことを考慮すれば、「漫画ブリッコ」以外の媒体に最も早く「おたく」という言葉を伝えたのは、提唱者である中森自身だと推測される。なお、八五年頃までの「おたく」言説には「漫画ブリッコ」を去った中森の関与が随所に垣間見られることから、当時彼が「おたく」という言葉を一定範囲に広める役割を果たしていたことが分かる。

例えば、浅田彰などが編集に携わったニューアカデミズムの批評誌「GSJ」（84・11、冬樹社）では、中森が「あまりにも『おそ松くん』な現在思想」というエッセイを掲載した際、巻末の著者・訳者紹介には「近く『おたく族』の生態学的考察をまとめる予定」とあり、『おたく』の研究」に続く新たな記事を用意していることが示されている。

また、文芸誌「鳩よ！」（マガジンハウス）八五年四月号の「20代感性事典」では「おたく族」という項目が設けられ、編集には中森が参加していた。解説の文末が「ところで、おたく、おたく、おたく」という挑発的な疑問で終わっている点は、第一回『おたく』の研究』と共通しており、この項目の解説に中森が携わっていたことをうかがわせる。

さらにパソコン誌「ログイン」（エンターブレイン）同

年八月号の「ニッポン放送のヤングパラダイス 三宅裕司の潜入ルポ おたく族を探る!!」と題された特集記事では、四ページに渡って多彩な「おたく」の具体例が紹介されるとともに、「おたく族っていうコトバのルーツはなんや？」というコラムが設けられ、中森のインタビュ어가掲載されている。ここで中森は「おたく」誕生の経緯を解説し、そのまとめとして「変な意味ではぜんぜんなくて、誰もが持ち合わせている感覚を、流行言葉としておもしろく取り上げていってほしい、それだけです」と述べている。

なお、特集記事の本文には「誰にでも、おたく族の心は存在するということだ。このページでは、おたく族を虐待しているのではないのだ。どちらかとゆーと礼賛しているのではないかねーといったところである」という記述が見受けられる。この記述はコラムに掲載された中森のインタビュ어가、「おたく』の研究」連載打ち切り直後に「Sage」のコラムで彼が述べていたこととも共通した内容となっている点は興味深い。

もちろん、これは「ログイン」の特集の母体となったラジオ番組のコーナーが「近代の若者の新風俗に対して鋭くメスを入れてしまうという内容のことを、軽々しくおもしろく紹介」するという性格によるところも大きい。

しかし「おたく族っていうコトバのルーツ」が中森とさ

れていることから、『おたく』の研究」連載打ち切りや「おたく」論議をめぐる中森の一連の発言が、この特集記事に反映されていた可能性も無視できないだろう。

さて、そもそも「おたく」はその出自を見る限り、当初はロリコン漫画誌という限定的な範囲でのみ流通する言葉でしかなかった。しかし一連の「おたく」論議の影響もあって、「おたく」という言葉は急速な広がりを見せたようである(6)。当事者の一人であった大塚も「漫画ブリッコ」八四年六月号の投稿欄において「おたく」なる語はすっかり定着してしまいました」と述べていた。次章ではその具体的な様相に目を向けていく。

三 「おたく」発信地としてのコミックマーケット

「漫画ブリッコ」に連載を持っていた竹熊健太郎は、『おたく』の研究」連載当時の状況について「おたくの研究」の第一回は6月号ですから、5月売りかな。それで8月に晴海のコミケがあつて、もうそのときには「おたく」という言葉はおたくの間で燎原の炎のごとく流行っていました」と述べている(7)。

この証言をもとにコミックマーケット(以下、コミケと略称する)関連の資料を調査した結果、「コミケットカタログ25」(83・12、コミケット準備会)に掲載された漫

画作品集「コミケットセレクション'83」(同)の広告に、少女が「おたく」を嫌がるイラストが描かれている。つまり第一回『おたく』の研究」から半年程で、コミケット準備会の公式発行物に取り上げられるほど「おたく」という言葉はコミケに波及していたのである。

また、翌年の「コミケットカタログ26」(84・8)と「コミケットカタログ27」(同・12)では、漫画やイラストでコミケの様子を紹介する「新田真子のみみけつとすくらんぶる」というコーナーに「おたく」が登場している。具体的には、前者では「昨今話題になっている」おたく」とよばれる方々への限定情報 あんちおたくくるっく!」と題された記事が掲載され、周囲から「おたく」に見られないための服装や髪型の指南がイラスト付きで行われている(図1)。一方後者では、同コーナーに掲載された漫画に髪型やメガネが特徴的な「夢のハリセンおたく」なる男性キャラクターが描かれている(図2)。

新田のコーナーで顕著なのは、特に「おたく」の外見的特徴がパロディ化されている点である。こうしたパロディが成立するためには、受け手と送り手が元ネタ(「おたく」の外見的特徴)に対して共通認識を持っている必要がある。先の二つの例では、そもそも「おたく」とは何かという解説は行われておらず(8)、コーナータイトルに「昨今話題になっている」おたく」とあること

から、少なくともコミケ26までにはこうした共通認識が参加者の間に生まれていたと考えられる。

このような状況を促進した要因の一つとして、これらの広告や記事の掲載元となった「コミケネットカタログ」の存在が考えられる。このカタログはサークルリストや会場案内といった参加に必須な情報が掲載されており、参加者の大多数が購入していた。コミケ25から27までの参加者数は合計で八万人にもなることから、その販売規模は非常に大きいものであったと思われる(9)。したがって、このカタログが参加者の間に「おたく」という言葉を波及させる役割を果たしていた可能性は高いだろう。

コミケがこうした状況にあった最中、「おたく」という言葉がこの場を介して様々な言説へと広がりを見せるようになっていた。例えば、参加者によって「おたく」という言葉が流通規模の大きい商業誌へと伝えられたのである。その先駆的存在と考えられるのが、当時「ゲームフリーク」というサークルを主催していた田尻智である。

田尻は八三年三月からゲーム攻略同人誌「ゲームフリーク」を製作するとともに、「ログイン」を中心にライター活動を行っており、同人誌と商業誌の両方に関与できる稀有な人物であった(10)。「ログイン」では「ビデオゲーム通信」というコーナーを担当し、「ゲームフリーク」

の活動内容や同人誌の情報が紹介されていた。つまり、このコーナーは同人誌レベルの情報が商業誌レベルにまで浮上することが可能な場であったのである。

田尻がこの場を介して「おたく」という言葉を伝えたのは、「ゲームフリーク」が八四年八月のコミケ26に参加する直前であった。田尻はその告知を「ログイン」同年九月号の「ビデオゲーム通信」に掲載し、ここで「マンガ同人誌がひしめくコミケで、ゲーム専門誌がどこまで通用するか、今から楽しみです。クラスのおたく族が休み時間に騒いでいるので御存知でしょうが、8月19日、日曜日、会場は晴海の見本市です」と述べている。

この場の特性が最も顕著に現れたのは八五年一月号である。「ビデオゲーム通信」に掲載された「ゲームフリーク」のイラスト担当・杉森建の漫画「がんばれ！奈夢子ちゃん」では、スタープレイヤーのゲームマニアが「おたく」と評されている。この漫画の初出は「ゲームフリーク第一四号」(84・9・25)であると紹介されていることから、同人誌に描かれたものが商業誌へと直接伝えられたことが分かる。

また、田尻のようにライター活動を通して「おたく」という言葉が商業誌へと伝えられたケースが見られた一方で、コミケの参加者が商業誌の投稿欄に「おたく」という言葉を伝えるケースも見受けられた。例えば、多彩

な投稿欄を有していたアニメ誌「月刊 OUT」(みのり書房)八五年四月号の「MIX・SAND OUTアンケートカードさん発表!」では「★冬コミケの朝、会場で会った多田勝英いわく、「今日はコスプレしてきた」見ると、いつもと変わらぬ姿。「で、何の?」「フホホホ、」おたくだ、おたく!」という投稿が寄せられている。また、同年九月号の「お笑いエトセトラ」に寄せられた「もう二度と見たくないもの」という投稿文(ドラえもんのコスプレをした男についての話題)に対して、編集部は「オタク」のコスプレをしたヤツ!わざわざあんなモンのコスプレなどせんでも、そこら中に腐るほどおる!」というように、四月号の投稿を踏まえたコメントを残している。

「月刊 OUT」の特徴について松谷創一郎は(「オタク」について執筆者と読者が言及する言説が頻繁に見受けられる。それらは、(オタク)当事者である(はずの)読者が自己や他者を(オタク)と規定したうえで(はずの)言及であり、「オタク」による(オタク)語り(「オタク」の自己言及」といった状況をも呈している」と述べている(11)。先の投稿は松谷が指摘した「オタク」の自己言及」の具体例であるとともに、コミケに広まりつつあった「おたく」に自己を重ねパロディ化して楽しむ様子うかがい知ることができる。

さて、コミケの参加者たちとは別に、その周辺あるいは外部から「おたく」に言及した言説も当時存在していた。その最初期のものとしては、サブカルチャー誌「宝島」(宝島社)八四年三月号の「漫画同人誌大集会に2万人。マニア的自閉症児が増殖中!」がある。この記事では「おたく」という言葉の出自を中森「『おたく』の研究」であると解説しており、「おたく」の定義についても「『おたく』の研究」と多くの共通点を持っていた。

しかし、その一方で「おたく」は「マニア的自閉症児」「明るい自閉症児」という独自の意味づけが行われ、「身内だけになると異常にエネルギーギツシユになる人」は「ちよつとアブナイ」というように、その異常性が印象付けられている。さらに同年一〇月号の「巨大化した漫画同人誌フェスティバル「コミケ」のビョーキ度報告」ロリコン系エロネタに人気が集中心!?」でもこの傾向は変わらず、ロリコン系同人誌を求める「おたく族」は「現実よりも虚構のヤラシー事に感じちやうつてのちよつと救い難いものありますねえ」と評されている。

このような傾向が見られたのは、当時コミケが異常な若者を発見する場と見なされていたことが関係している(12)。その契機となったのは七〇年代末頃から始まったロリコンブームであった(13)。コミケの様子が週刊誌などで取り上げられるなか、コミケの参加者に対して「ロ

リコン」「ニジコン」「ネクラ」といったレッテルを貼り、彼らを異常なものとして描き出そうとする言説が登場したのである。例えば岩田薫「大学生をおおうロリコン症候群」(82・9、「潮」)や、「ペーパー・アイドルに熱中するニジコン症候群にキミは感染してないか？」(83・11・8、「週刊プレイボーイ」)などがある。

「宝島」の記事もこうした言説と同様の系譜・文脈に位置するものであり、したがって「おたく」という言葉は、それまで使用されていたネガティブなレッテルと同様の役割を果たすために、その異常性を強調するような意味づけが行われたと考えられる。

四 「新人類」言説全盛時代の「おたく」

八五年頃からの「おたく」言説は、これまでと異なる価値観を持つ「新人類」と呼ばれた若者を取り上げた書籍に見受けられる。例えば、浦達也『新人類を読み解くキーワード』(85・7、駸々堂出版)、中野収『新人類語——異人種を迎えるビジネスマンのために——』(86・1、ごま書房)、浦達也・松村洋・宇佐美亘『ワードマップ 感覚の近未来——浮遊するポストモダン』(86・11、新曜社)がある。

これらの言説で引き合いに出されているのは、「おた

く」独特のコミュニケーション(お互いを「おたく」と呼び合うこと)である。浦は「おたく」を「中森氏と同世代の60's KIDSよりも、もつと新しい(というより珍しい)新人類」として「おたく」という古い感性が化石化したような言葉を、小学生が使う「キミさ」に注目している(14)。さらに、ファミコンなどデジタル機械との関わりで培われた彼らの感性は「ヒトとヒトとの関係を「の・ようなもの」として遠いものにし、ヒトとモノ(キカイ、メディア)との関係をナチュラルで、近いものにする」と指摘している(15)。

一方、中野は「おたく」を「人間関係語——距離をとる新人類」の項に分類した上で、「目の前の「アナタ」や「キミ」は二の次で、「オタク」の知識が自分と比較してどうなのか、が「オタク族」の重要な関心」と述べ、彼らのドライな人間関係を説明している。

こうした指摘の背景には、当時普及しはじめていたテレビゲームやパソコンといったメディアによって、自閉症的傾向を持った若者が増加したとする認識の広まりがある。人間同士ではなくマイコンのような機械(モノ)との関係が深まることで、対人関係に支障をきたすと考えられていた。いわば「関係性の病」と捉えるこうした見方は「おたく」のコミュニケーションにも適用され、学術的な裏付けも行われるようになったのである。なお、「お

たく」は「新人類のなかでも「ヘンなヤツ」扱いを受けている」と中野は指摘しており、「新人類」のさらに異質な部類と見なされていたことが分かる。

この点に関連して、当時「**命／＼**」という流行語を生み出した渡辺和博『金魂巻』（84・7、主婦の友社）の続編『金魂巻の謎』（85・11、主婦の友社）を挙げておきたい。ここでは戦後四十年の暮らしと志向をテーマごとに解説し、各々に該当する「**命／＼**」の人格類型が描かれている。その一つである「新人類**型**エディター」のプロフィール「読書」の項に注目すると、「パソコン少年向けの本は、ありやオタクよ！と馬鹿にするが、新人類モノ紹介本は熟読し、みずからの新人類としての自覚を強化する」とある。

渡辺の『金魂巻』は八四年当時ベストセラーとなっていたことから、続編である『金魂巻の謎』も広く社会に流布していたと考えられる。この『金魂巻の謎』に「おたく」という言葉が見られたことは興味深い。また、ここでは「おたく」という言葉の解説が一切行われていないことから、すでにこの時点で「おたく」の意味がある程度共有されていた可能性もあろう。

以上のように「新人類」言説全盛時代の「おたく」は、「関係性の病」を持った特異な「新人類」として捉えられていたのである。しかし、それとは異なる視点から

「おたく」を捉えていたのが「漫画ブリッコ」の編集者であった大塚である。八五年当時、大塚は出版業界専門の新聞「新文化」（新文化通信社）において「コミックジャック」というコラムを担当しており、時には特集記事も執筆していた。

大塚はこのコラムや特集記事において度々「おたく」を取り上げていた。例えば「新書店論 マニアから絶大な信頼を得る 漫画専門店①」（85・11・14）では、漫画専門店と関係が深い「マニア」という畸形化した読者」について「新人類」中森明夫によって「おたく族」と命名された（中略）読者群」であると解説し、彼らは「アニメ情報誌やロリコミックを商業的に成立させる基盤」「まんが専門店の営業的な成否を決める大きな要素」であるとしている。

また「コミックジャック」三コン「作品、遂にメジャー進出」（88・11・17）では、萩原一至『BASTARD!』を「おたくコミックの記念碑」「（おたくカルチャー）の集大成ともいえる作品」「究極の（おたく）コミック」と評し、それが男の子だけでなく女の子に受けている理由について解説している。

この他にも「コミックジャック コミュニケーション空間として購入」（87・5・14）では、「おたく」（アニメファンに対する差別用語）」とする記述が見受けられる。か

つて大塚は「漫画ブリッコ」において、「おたく」を差別用語と判断して批判的な態度をとっていた。この記述からは、そのような認識が年月を経て変化することなく、「おたく」の紹介に反映されていたことが分かる。

こうした記事は大塚の著書である『システムと儀式』（88・8、本の雑誌社）、『物語消費論』（89・5、新曜社）に収録されたことで、「新文化」の読者以外にも広く知られることとなった（16）。また、これらとは別に中森の「おたく」差別について語られた『（まんが）の構造』（87・4、弓立社）も出版されている。すなわち「おたく」論議の当事者であった大塚は、中森と同じく「おたく」という言葉を当時の言説に広める役割を果たしていたのである。

五 「おたく」言説における「おたく」差別の様相

八六年、これまで取り上げてきた言説の中でも最大の読者規模と波及効果を有するであろう媒体に「おたく」という言葉が登場した。それは「日本経済新聞」八七年四月二八日夕刊に掲載された「ネクラの証明？男性アニメ族」と題された記事である。

「大学生から社会人まで、新人類男性にだんだん浸透していく」女が怖い、アニメ族の実態」について述べ

ているこの記事では、八一年から八二年に登場した彼らが、コミケで架空の美少女を描いた同人誌を売買していることを取り上げ「やることなすこと、なんとなく暗い」と評している。また「アニメーションの月刊誌「O U T」も、かつてコミケットに集まる若者像に関する特集を組み、二十代の男性の美少女アニメファンの特徴はおとなしそうな顔で小太り、色白、ひきこまれそうな暗さと分析している」と紹介し、指摘の妥当性を印象付けている。

これに対して「正統派を自認する美少女専科のアニメ族」である二〇代の会社員が登場し「ぼくたちの目から見てもイヤだなと思うのは、美少女のエロチックな漫画を描くグループ。『おたく族』と呼んで一線を画している。（中略）彼らと一緒にされて、暗いという批判を受けるのは心外」との反論を述べている。この発言から「正統派」の「アニメ族」が「おたく」に対して明確な嫌悪を抱いており、自己との差別化を主張していることが分かるだろう。ここでは自分を「正統派」とすることで「おたく」を「異端派」と認識させ、批判の矛先を彼らに向けようとする態度が見受けられる。

これに対して記事では「とはいうものの、お互いに五十歩百歩の感がなきにしもあらずだ。生身の女性が怖いという点では共通しているのだから」とされ、異議は一

職されている。つまりここでは、両者の差異は些細なものとして扱われ、「おたく」と「正統派」の「アニメ族」を同一視しているのである。

しかし「正統派」の「アニメ族」にとって、その差異は非常に重要なものであったようだ。『「おたく」の研究』以降、「おたく」言説には「ヘオタク」による「ヘオタク」語りⅡ（ヘオタク）の自己言及」といった様相が見られた一方で、「おたく」を自己とは差別的に扱う態度が見受けられるようになっていく。第三章で紹介した「月刊OUT」の読者投稿に対する編集部のコメントにも、その傾向が見取れるだろう。そして、当時この傾向が顕著に見られたものの一つがこの「月刊OUT」であった。

例えば「月刊OUT」の読者は「アニメファン」もしくは「アウシタン」「アウシターナ」と呼ばれ、「おたく」とは意識的に差別化されていた。それをうかがわせるものとして、八五年五月号から始まった「宇宙編集者アウトシャイダー」という企画がある。これは特撮テレビ番組のパロディ企画であり、編集長扮する主人公が「アニメ業界の闇にあやしうごめく悪の影、亜子議界ブームの陰謀」に立ち向かうというものである。この中に登場する敵役に、下級戦闘員「オタクラー」という「手におえない性悪マニアども」がおり、ロリータアニメを好む存在とされている。一方「アニメファン」は「オタクラ

ー」を含む「亜子議界」によってロリータアニメを売りつけられる少年達であり、ヒーローであるアウトシャイダーの救済対象とされるなど、その扱いは真逆である。

さらに「月刊OUT」では、読者を「ファン」、「おたく」を「マニア」と呼んで細かく区別していた。例えば八五年一〇月号の「アニメ虫図鑑」では、「コミケットに集まる虫（マニア）」「アニメショップ映画館に集まる虫（マニア）」が数種類の虫に見立てて分類されている。これらは「毒をもった虫」などと解説され、「アニメファン」とは異なる問題視される存在として「マニア」を描いている。なお、その一つである「セルタカリ・コガネムシ」と分類された男性図のキャプションには、「オタク目・金目当科」という表記や「虫究極の姿!!」という解説も見受けられる（17）。つまり、問題視される「マニア」の中でも「おたく」は別格の扱いを受けていたのである。

この背景には「おたく」が好むとされたロリータアニメの存在があったようだ。当時のロリータアニメとは、美少女が登場するアニメの総称とされる一方で、特に性描写のあるアダルト向けアニメを指して用いられていた。「月刊OUT」でもロリータアニメに対する批判がしばしば行われ、八五年六月号の「アニメ・ジュンの大発見」阿素湖へ帰れ！ロリータアニメについてのマジメな話」

では、批判の根拠を「ロリータ以外のいわゆるフツウのアニメに対する思いいれ」や「アニメの特定のキャラクターに対する思いいれ」にあるとしている。その結果「愛すべきキャラクターを見いだしてきたファンにとっては、セックス中心のロリータアニメに不快な感じを受けた者がいたとしても無理はない」とされる。

この指摘は「日本経済新聞」の記事に見られた「正統派」の「アニメ族」の発言と類似するものであることから、「月刊 OUT」の読者をはじめ「アニメファン」の間の共通認識とされていた可能性が考えられる。また第三章の「宝島」などに見られたように、ロリータアニメやロリコン同人誌を好む人々に対するネガティブな意味づけが行われていたことも無視できない。「月刊 OUT」の読者の間でも、こうした状況に対する反発が見受けられた。

例えば「週刊プレイボーイ」八六年九月九日号の「人気キャラクターのSEXがドバツと登場 露出度200%で迫る「裏まんが」の凄い中味」では、ロリコン同人誌がコミケで盛況を博している様子を伝えている。これに対し「月刊 OUT」同年二月号の「OUT Reader's Voices Vol.49」に「ちよっと気になるコミケの話」という投稿が掲載され「仮に今後もこのような記事が続けば、世間は、コミケの会場はエロ漫画ばかりあふれかえるいかが

わしい場所で、そこに集まるファンは変人の集団だと勝手に思ひこみ、その結果全国の同人誌仲間が、コミケを正しく理解しないマスコミらの手によっていわれの無い不名誉なレッテルをはられ、コミケ活動の発展を大きく妨げられることにならないか」として、危機感を募らせている。

この投稿が掲載されてから半年と経たないうちに、前掲の「日本経済新聞」の記事が登場している。記事の内容は前述の通りだが、ここでその妥当性を印象付けるために紹介された「月刊 OUT」の特集とは、先の「アニメ虫図鑑」の「コミケットに集まる虫(マニア)」であり、そのなかでも「おとなしそうな顔で小太り、色白、ひきこまれそうな暗さ」とされるのは「ロリコン・バツタ♂」であった。周知のように同誌では、「アニメファン」とロリータアニメを好む「おたく」は明確に差別化されていた。この特集もそのような企図のもとに作られたものだったはずだが、「日本経済新聞」の記事ではそのような事情は一切汲まねず、両者は同一化されていたのである。このように捉え直すと「正統派」の「アニメ族」の異議申し立てとは、「月刊 OUT」に見られた「おたく」との差別化や、外部からの「不名誉なレッテル」に対する危機感といった諸々の要素を体现するものであったことが分かる。また、この記事は当時の「おたく」言説にお

いて展開していた「おたく」との差別化／同一化という動きの衝突であったとも言えるだろう。もちろんこのような衝突自体はこれまでにも起きていた。しかし「おたく」という言葉が一般化したとされる八九年以前に、全国紙という大きな影響力を持った媒体で起きていたことは、「おたく」という言葉の歴史上、注目すべき「事件」として取り扱う必要があると考えられる。

六 そして八九年へ

「おたく」という言葉は「新人類」言説全盛時代に「関係性の病」という意味合いを強く持つようになっていた。そして「おたく」という言葉が一般化する直前の八九年、大手週刊誌に取り上げられるまでになった際には、その捉えられ方に大きく二つのパターンが存在していた。それは①女性(あるいは男性)にもてない、②犯罪を招く、の二点である。

①の例としては「週刊プレイボーイ」二月二十八日号の「ああ、カワイソー特集 ついに「ネクラ」を越えたダサイ奴らが大增殖！オマエは果たして大丈夫か!?これがギヤルの嫌う『オタツキー』の実態だっ!!」がある。「オタツキー」とは、「おたく」の中でも「ニュー・リッチ族」に食い込んできた者をギヤルたちがそう呼んだことに由

来しており、「ダサくてクラくてどーしよーもない男たちの新しき名称」であるとされている。そして「童貞で苞茎」「女にフラれたりして傷つきたくないから女に近づかない。もちろん、セックスとも縁遠い」などといった「オタツキー」の特徴を列挙した上で、その度合いに応じた「オタツキー治療法」を提示している。

ここで想定されている「オタツキー」とは女性と縁のない男性であるが、逆に女性を取り上げたものとしてグラビア誌「スコラ」(スコラマガジン)七月二七日号の「オタツキーな女をメジャーな女に変える」がある。この記事では少女漫画やアニメが好きな女性が「オタツキーな女」と呼ばれ「アニメファン、ファミコンマニアなどを称してオタクの人々というわけだが、各ジャンルに閉じこもって、人の話を聞かないこじれちゃった人たち。この中でカワイイ女の子だけを救ってあげたい」として、男性がこのような女性といかにセックスするのかについて解説している。

続いて②の例としては「週刊SPA!」(扶桑社)三月二三日号の「気鋭の精神科医、野田正彰氏が分析!東京麹町小学校4年生殺人事件増加するゲーム世代」オタク族のやっぱり起こった「倒錯殺人」がある。ここでは「おたく」が「犯罪者予備軍」とされており、連続幼女誘拐殺害事件の犯人逮捕以前に「おたく」と犯罪を結び付け

ている点は、注目に値する。具体的には「気鋭の精神科医、野田正彰」が犯人像を分析するなかで「同性の友達がいらないうえ、異性への興味を育てることができず、同年齢の異性よりも、思いのままになる少年たちのほうへ興味がいく」とされた後、「『思いのままになる』というのは、場合によつては、あの今野真理ちゃん(引用者注・連続幼女誘拐殺害事件の被害者)の誘拐殺人犯のように少女に向かうこともあるわけです」と述べられている。そしてこの記事の五ヵ月後、連続幼女誘拐殺害事件の犯人逮捕を契機に、こうした「おたく」犯罪者予備軍」とする言説が爆発的に増加し、「おたく」という言葉は急速に一般化したのである。

本稿の冒頭で述べたように、八三年の『おたく』の研究から八九年の連続幼女誘拐殺害事件の犯人逮捕までの「空白の六年間」は、「おたく」史のなかでも具体的な様相が不明な「未踏地帯」であった。本稿はこの点に注目し、その開拓を試みた。その結果、これまで見てきたように、この六年間に「おたく」という言葉は「おたく」とされた人々の内外ですでに流通し、複雑な様相を呈していたことが明らかとなった。当時「おたく」という言葉は「おたく」の間で主に流通していた」とする安易な見方は、今後見直していく必要があるだろう。

【注】

- (1) 難波功士「戦後ユース・サブカルチャーをめぐる(4) … おたく族と渋谷系」(『関西大学社会学部紀要 第九号』05・10)、松谷創一郎(「オタク問題」の四半世紀―「オタク」はどのように(問題視)されてきたのか) (羽瀨一代編『どこか(問題視)される若者たち』所収、08・10、恒星社厚生閣)、森川嘉一郎「おたく」という文化圏の成立」(岩崎稔、上野千鶴子、北田暁大他編『戦後日本スタディーズ』80・90年代)所収、08・12、紀伊國屋書店、吉本たいまつ『おたくの起源』(09・2、N T T出版)など。
- (2) なお種々の言説資料を収集するにあたって、大宅壮一文庫の『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録』及びCD-ROM 検索、国立国会図書館の書誌検索及び雑誌記事索引、関連する参考文献を用いた。
- (3) 拙稿「おたく」誕生―「漫画ブリッコ」の言説力学を中心に―(『横浜国大 国語研究』09・3)。
- (4) 中森「僕が「おたく」の名付け親になった事情」(『別冊宝島104 おたくの本』89・12、宝島社)。
- (5) 中森「僕が「おたく」の名付け親になった事情」には「八三年十二月号には、「おたくの研究―総論」という文章が『江治ソン太』名で掲載されるが、これは切り捨

てられた僕に代わって『おとなクラブ』同人のM君が執筆した、しごく真面目な反論だった」とある。

- (6) 永山薫『エロマンガ・スタディーズ―「快樂装置」としての漫画入門』(06・11、イースト・プレス)は「中森のコラムで揶揄的に使用された「おたく」という言葉が論議を呼び、大塚英志と論争になるという前代未聞の展開によって「おたく／オタク」という言葉が急速に一般化していくことになる」と指摘している。

- (7) 「たけくまメモ 編集家・竹熊健太郎の雑感&業務連絡」竹熊健太郎、05・3・15、「中森明夫「おたくの研究」をめぐって(2)」, アクセス日は○九年八月五日。

- (8) [http://takekuma.cocolog-nifty.com/blog/2005/03/post_11.htm] ただし、「おたく」の方々のスタイルというのは、コミケットセレクション⁸³、²⁹⁰及び²⁹¹頁をご覧になればおわかりいただけるとおもいますが」との記述がある。「コミケットセレクション⁸³」の該当ページを確認したところ、外見的特徴をイラストと文章で紹介した「コミケットに集まる男の子たち」という記事が掲載されているものの、「おたく」の表記は見られない。なお、この記事に対して大塚は「漫画ブリッコ」八四年六月号の投稿欄において「中森氏の「おたくの研究」と同じレベルのロリコンファン批判」であると述べている。

- (9) 『コミックマーケット^{30s}ファイル』(05・3、有限会社

コミケット)。

- (10) 宮昌太郎、田尻智『田尻智「ポケモンを創った男」』(09・4、MF文庫ダ・ヴィンチ)。

- (11) 松谷「オタク問題」の四半世紀―(オタク)はどのように(問題視)されてきたのか?。

- (12) これについて宮台真司「新人類とオタクの世紀末を解く」(「中央公論」90・10、中央公論社)は「(引用者注・対人不得意人間が)イジメられるのは、何かの機会に普段の消極性を振り捨て、自己主張を始めるときだった。通常性の破壊は周囲に口実を与え、「場違いなデシヤバリ」として見出されるキツカケを与えた。(中略)実は八三年頃からのオタク差別が人格差別として登場してくるのは、これと構造的バラレルである。そこではいわずば集合次元の「文化的デシヤバリ」(コミケットもその一例)が差別されていたのだ」と述べている。

- (13) ロリコンブームについては、ササキバラ・ゴウ『(美少女)の現代史―「萌え」とキャラクター』(04・5、講談社現代新書)、阿島俊『漫画同人誌エトセトラ⁸²』⁹⁸ 状況論とレビューで読むおたく史』(04・9、久保書店)などに詳しい。

- (14) 浦『新人類を読み解くキーワード』。

- (15) 浦「おたく族と新人類」(浦達也、松村洋、宇佐美亘『ワードマップ 感覚の近未来―浮遊するポストモダ

ン』所収)。

(16) なお『システムと儀式』には、大塚が企業の依頼で作成した「竹下通りまんが専門店のための企画書」が収録されており、このなかに「アニメ・コミックファンの中高生Ⅱ暗くてダサイ(例えば、「おたく族）」という記述が見受けられる。

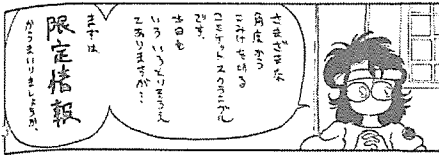
COMIKET SCRAMBLE

初版の
二ヶ月と
七人いる。



(17) 松谷「オタク問題」の四半世紀―「オタク」はどのよ

うに〈問題視〉されてきたのか」はこの記事について、「月刊OUT」で「オタク」という言葉が初めて見られる」としている。しかし本稿の調査によれば、それ以前に第三章で取り上げた八五年四月号の投稿欄「MIX・SAND OUTアンケートカードさん発表!!」に、すでに「おたく」という表現が見受けられる。



あんちおたくろく!

『おたくろく』のスーツ
男物はやはりスーツ。
おたくは、おたくのファッション。
おたくは、おたくのファッション。
おたくは、おたくのファッション。
おたくは、おたくのファッション。

『無印良品』
おたくは、おたくのファッション。
おたくは、おたくのファッション。
おたくは、おたくのファッション。
おたくは、おたくのファッション。

『メタルク』
おたくは、おたくのファッション。
おたくは、おたくのファッション。
おたくは、おたくのファッション。
おたくは、おたくのファッション。

『おたく』
おたくは、おたくのファッション。
おたくは、おたくのファッション。
おたくは、おたくのファッション。
おたくは、おたくのファッション。

